

「相場の立て方」と「確かめ方」が投資で成功する一番の近道

1 月22日安値を大底とみるのは「難あり」との認識

07年第3集、夏季号において月足変遷における日経平均株価の注目点を述べました。

07年2月、6月と高値を切り下げたうえで重要な10月変化月が高値で決まってしまったことは2010年2月までの長期低迷を示唆するものであり、現時点（2月20日現在）で1月22日安値を大底と見るには「難あり」との認識は必要であります。

07年末の相場観としては08年は良くてモミアイ相場、悪ければ長期低迷（下げ相場）とし、下げ相場の場合は下げ止まりの位置を見て新たに相場観を整えるつもりでした。しかし年初から余りにも下落幅が大きすぎ、仮に1月安値を割らずに推移したとしても、先の2010年変化月までは戻り相場としてしか扱えぬ状況です。

図をご覧ください。

08年1月22日安値1万2572円は実に03年安値7603円と07年2月高値1万

8300円の半値1万2950円を割り込むものであり、01年3月陰線から基本数値83ヶ月で同水準に戻ってきた変動となっています。

基本数値からの反発は経験的には期待を持っても良く、その意味で1月が当面の底である可能性も残されます。しかし1月安値が1万2950円を割り込み、変化月としては2月がはるかに重要であることを考えれば、少なくとも2月出発で先行スパン上限を上抜き、また2月が戻り高値とならない確証が得られなければ、さらなる下落の懸念は消えないのです。

一目均衡表においては、いったん下げ相場が明確になった以上、下げ止まりとその後の底値固め（一定期間安値を割らない）を確認するか、一気に均衡表を上抜く上昇力を確認するまでは上げ相場を考えるべきではありません。

したがって下げ相場では下げ三波動構成を適切に見つけ、反発を期待しうる安値位置を知ることが大事と

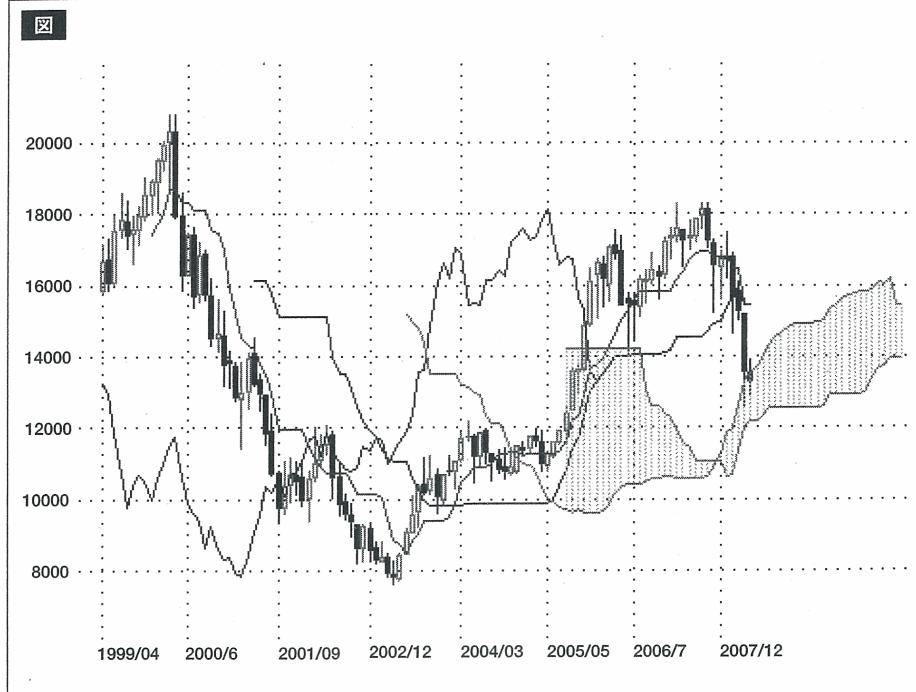
なりますが、それを踏まえて前回は03年安値に至る変動を紹介しておきました。

個別銘柄を見ればお判りのように高値からの一本下げがほとんどであり、適切な三波動構成が見られません。中間波動を形成するにはよほどの上げ幅が必要で、実に前途多難な今後の相場といえるでしょう。

投 資は自分の判断と責任で行なうことが成功へ導く

少なくとも本誌の読者ならば、07

年6月からの下げ相場で大打撃を受けた方はほとんどないと思うのですが、それほど本誌著者である竹内一先生の巻頭文は、どの相場評論と比較しても、実に適切に問題点を指摘するものでした。正しい相場観を持つことの重要性は改めて強調するまでもありませんが、仮に損失を大きくしたという方がおられれば、この際改めて整理して頂きたいことがあります。03年9月から今回まで19回、4年以上に渡り解説してきた一目均衡表講座は、すべて「相場観の立て



出所：インフォシーカマネー

方」「確かめ方」を主たるテーマとして述べてきました。

重要なことはすべて述べていますが、改めてこれらを活かすために苦言を呈しますことご了承下さい。

まず何よりも投資をされる以上、利益を得ることが当然の目的であります。そのために必要なことはすべてご自身で成すべきです。

世に投資法、売買法は溢れていますが、これらはすべて「参考にして下さい」という範囲を超えるものではありません。「あなたを儲けさせてやる」という商品（サービス）は存在し得ないです。

一般投資家はプロと異なり、いつ如何なる場合も売買せねばならない、という状態には置かれておりません。

したがって売買しないという選択も許されるのですが、この点を強調すれば「判る相場を相手とし、判らぬ相場は触れない」ことが極めて大事となります。

これは一般投資家にとって非常に大事なことです。本当の相場上手は、判る相場は判るなりの売買をし、判らぬときには判らぬなりの売買を成すのです。

引かれ玉を持った状態で相場観を立ててはならぬ、という戒めは、決して相場観を持つことを否定するも

のではありません。損失が膨らむということは、そのこと自体、判らぬ相場に手を出してしまった（あるいは判らぬとすべきを、誤って判るものとして手を出している）ことの証左であり、いったん白紙に戻して判る相場を待てというのが古人の知恵であります。

相場は基本的には「買い」「売り」いずれを入り口としても良いですから見誤りを売買に活かすことは可能であり、途轍（どてん）商いという言葉は実に見誤りを活かす工夫そのものといえるでしょう。

ただし、相場の入り口においてすべての資金を投入するような人には、このような工夫も出来ないわけです。要するに、相場観、売買手法など、相場に関するもろもろのすべてでは、投資家諸個人の置かれる状況、生活設計で大きく意味が変わるものなのです。

だからこそ自分で考え、自分で判断するということが、すべての根底にあるべきですが、これは決して難しいことではないはずです。

ご自身の生活設計に照らして目的を整理する。そしてさらにご自身の能力を把握し、その能力に応じた売買をする、だけのことです。が、そういう人でなければもろもろのこと

を「参考」には出来ないことを知るべきです。

偶然にして儲けたものは、必然的に損をし、経験は後に生きない。

必然的に儲けた人、すべてを自らの責任で投資経験を培ってきた人は仮に苦労はあっても、また失敗しても必ずそこから次の一步を踏み出すことが可能であることを、強く認識していただきたいと思います。

次 回は07年の変動を振り返り 基本的な考え方を説明

このようにくどくど当たり前のことと述べるのは、07年の変動が、少なくとも日経平均株価においては例外的に逃げ場の多い変動であったにも関わらず、多くの一般投資家が傷を負ってしまっていることを聞くからで、何か決定的に欠けているものがあるとしか思えないのでです。

次回は07年1年間の変動について振り返り、相場観の立て方と、確かめ方の具体例を提示し、如何に対処のしどころがあったかを解説したいと思います。改めてその前提になる考え方を説明しておきましょう。

①上げ相場も下げ相場も三波動（三波動の連続）として捉える。

安値、高値の切り上げが続く限り

は必ず上げ相場と認識されます。逆もまたしかりです。

一目均衡表各線は押し、戻りとして機能しやすい。

たとえば2000年高値から03年4月安値までの変動は高値、安値の切り下げで、常に均衡表が戻り高値に位置する変動でした。

03年4月から昨年2月までは安値、高値の切り上げで均衡表は押し目として機能しています。

②モミアイ相場はある価格を相場水準とする変動で、均衡表は相場水準として機能しやすい。

実線と均衡表が交わる値段に注目して下さい。

08年1月陰線は先行スパン上限と交わっていますが、結果的に03年から08年1月までの変動はこの水準でのモミアイと見なせます。

このように、相場の変動は動く相場と、動かぬ相場が同時重複的に、あるいは独立して成されるのであります。

相場の時間関係、時間関係における計算値のつけかたを調べることで明確に方向を判断し得るポイントが出てきます。以上を踏まえたうえで次回07年の変動を振り返りたいと思います。

日経平均株価は戻りの範疇にとどまるが3月安値割れはない

今 後の日経平均株価の展開について検証を試みる

今回は昨年の相場について、対処の仕方が如何様にもあることを説明するつもりであります。

原稿執筆当時(2月)において日経平均株価の低迷は決定的であり、6月においても読者には昨年の変動が意識に残っているだろうと考えたからです。

実際の変動は3月17日に1月安値を割り込んだものの、5月16日現在1万4392円の高値まで戻し、一般的には昨年相場の反省に目を向けるよりも今後の変動へより意識が傾きがちであります。

昨年までの変動を詳細に説明すれば紙面も足りず、ここは簡単な説明にとどめ、今回は改めて今後の日経平均株価について考えてみたいと思います。

図1をご覧ください。

これは月足日経平均株価の均衡表グラフですが、昨年の変動を分けて整理するならば①2月高値からの下落、②3月安値から6月までの戻り相場、③7月後半までの高値持ち合い、④7月以降の下げ相場

ということになるでしょう。

昨年の相場で最も判断に苦しむべきは①②でありましょう。まず一点は2月高値の天井打ちの形が明確ではなかったということ。二点目は3月5日安値から6月20日高値に至る変動が細かく繰り返し上げていった動きではあっても、結局は2月27日高値から3月5日までの僅か7日間の下落幅に含まれてしまったことです。ただ、いずれにしてもモミアイの範疇に含まれる変動であったと考えられます。

モミアイ相場は特に変化日は決まりにくく、また計算値も決定打となりにくい傾向があります。それ故に2月高値に至る上昇分の時間が充分経過する昨年5月過ぎまでは③、④ともに明確にイメージできるものではありません。

昨年の相場変遷への対処が楽であったのは③までの過程を経て④が明確になり、①以前に整理していた長期変遷での重要変化日(月)を承認する形で時間、値段、そして均衡表のすべてが適切に機能したからです。言い換えれば準備していたイメージに沿う変動は、常に対処が

楽です。

い ずれ「上げ」「下げ」を明確にする瞬間が来る

さて前回は一目均衡表の基本として次の二つの考え方を提示しました。

(1) 上げ相場も下げ相場も三波動(三波動の連続)として捉える

(2) モミアイ相場はある価格を相場水準とする変動で、均衡表は相場水準として機能しやすい

相場変動を上げ相場、下げ相場、モミアイのいづれか、つまり動く相場と動かない相場に分けるならば図2のような変動イメージが頭に浮かぶことでしょう。

相場の方向性を考える場合、相場の騰落をそのまま今後の方向と見なすべき変

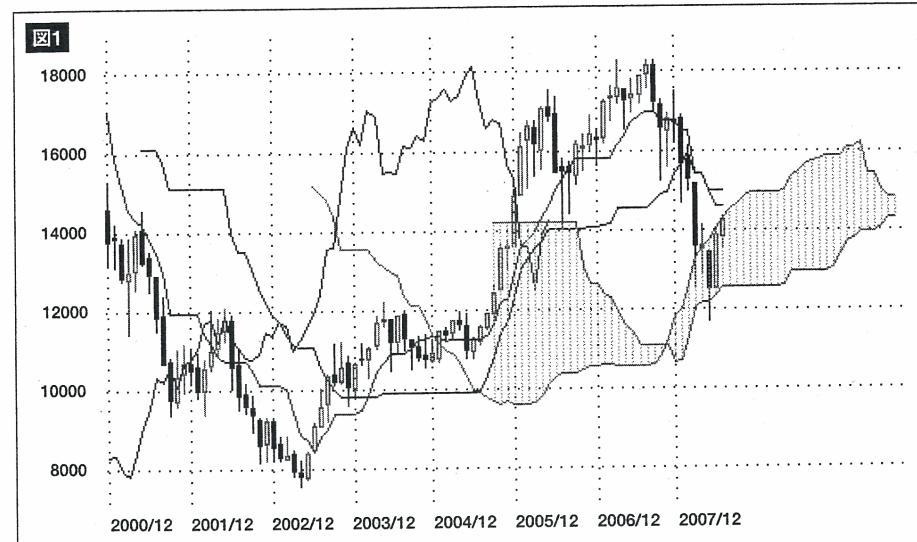
動と、「戻り」「押し」という言葉で表現されるように、方向と見なすべきでない変動に分けられます。

モミアイ相場は相場水準が動かない変動でありますが、モミアイ自体は一本の騰、一本の落によってなされるのであり、規模によってはやはり明確な「上げ相場」「下げ相場」ということになるでしょう。

また上げ相場、下げ相場とは言うものの、これは変動しだいで将来的にモミアイ相場と見なしうるので、動く相場、動かない相場に厳密に分けることは出来ません。

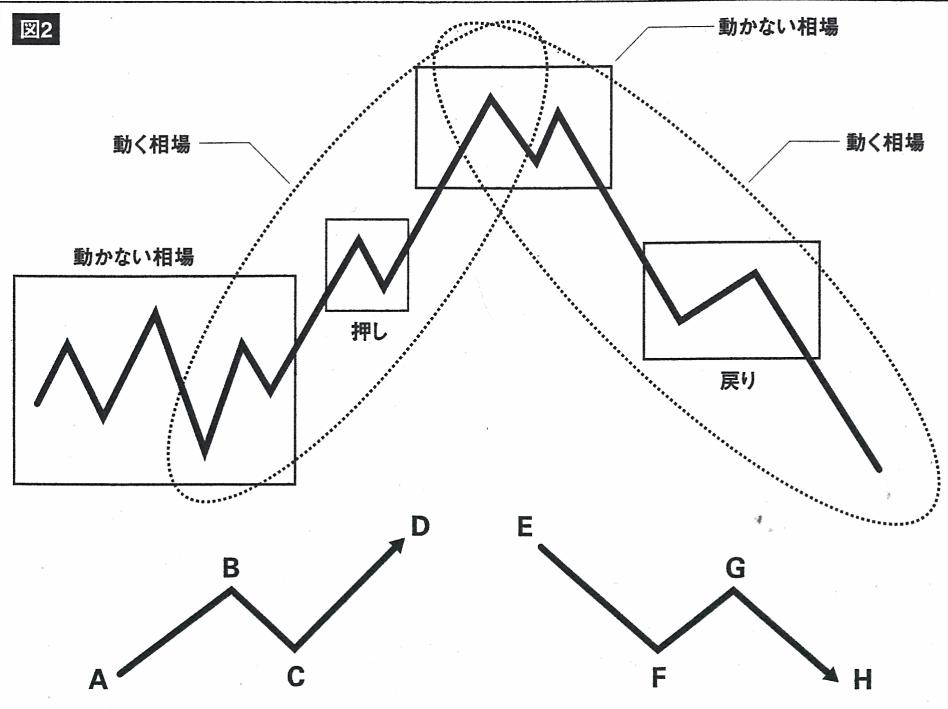
つまり相場の方向はそれを論ずるにあたり、あまりに抽象的になりすぎるのです。

そして図2のように動く相場も、動かな



出所：インフォシークマネーより

図2



い相場も同時並行的に、時に独立的に変動がなされる点を了承したうえで、やはり(1)(2)で相場変動を抑えるならば、必ず適切に「上げ」「下げ」を明確にしうる瞬間があるのであります。それはともかく一目均衡表において(1)(2)で相場変動を考えることは抽象的な図2に極めて具体的な限定を与える結果となります。

明 確な下げ三波動を構成した銘柄に注目

昨年の変動で例をあげれば、やはり10月高値が最も典型的であります(昨年秋季号でコメント)。昨年2月高値、6月高値は03年4月安値からそれぞれ47カ月、51カ月

の基本数値で高値位置をつけ、03年からの三波動では計算値を達成したものの05年4月安値からの計算値は上抜けず、対等数値での時間を既に経過しています。

さらに89年以降の変動から見れば2月高値、6月高値ともに限界に近く、ぎりぎりのポイントから均衡表を割り込む結果となってしまった変動でした。

従って、7月までの高値保合いを経た後は、考えるべきは先ず(1)の下げ三波動を考えるべきであり、その時点で変化日と計算値を出すことが可能です。

月足においては2月を起点として6月まで5カ月、6月から5カ月目は10月となりますが、これは06年6月安値を起点としても極

めて重要であったことが判るでしょう。

さらに(2)の相場水準の観点からはやはり10月からの騰落が極めて重要であったことは既に述べています。

昨年7月に日足均衡表を悪化させた後の変動での高値は常に戻りの限界を超えるものではなく、時間関係と均衡表が適切に機能する変動だったのです。

あまりに複雑化してはかえって判らなくなりますので、また改めて説明する機会があると思いますが、今後の日経平均株価について月足で簡単に整理しておきたいと思います。

変化月では6月、8月、10月に注目しております。

6月変化月は昨年2月から17カ月目、6月から13カ月目、10月からは9カ月目の基本数値の重なりと同時に、10月を中心に9の対等数値であります。さらに(1) 1998年10月安値を起点に置けば101カ月目を昨年2月、109カ月目を10月に迎えつつ今年の変動で同水準に達しています。(2) 117カ月目が6月ということで、目先は6月が最重要、ここからの騰落は相場の方向性を促しやすいのであります。

今年8月は05年11月から33カ月目です。03年4月安値から05年11月までの上昇が33カ月、上昇時間分のモミアイを想定すれば33カ月目で今年8月になり、05年11月高値1万5000円どころでは戻り終了を促しやすいと、月足基準線の位置からも確認

できます。

均衡表を見れば3月安値以降4月、5月も変動は二本の先行スパンに収まるものに過ぎません。

6月以降この先行スパン上限が上げていることは、日経平均株価は3月安値以降の上昇が依然として戻りの範疇を超えないということであります。現時点では3月安値を割り込む変動は想定できず、また上値は抵抗帯が多いというわけで、今後の変化月もあくまで目安で売りも買いも難しい局面にあるといえます。ただし個別銘柄によっては様相が異なるものもあります。皆さんにはやはりわかりやすい相場の、判りやすい位置を売買の入り口としてほしいところです。

個別銘柄の天井は大体一昨年4月、昨年2月、昨年6月以降に分けられるかと思いますが、天井に至る局面で上昇力があり、かつ天井から明確な下げ三波動構成が見られるものを選択ください。

天井を早い段階でつけた銘柄のほうがより適切に安値の確認が出来ることでしょう。

次回は改めて均衡表の基本に戻り、簡単、単純なことから整理してみたいと思います。

パソコンをお持ちの方はブログ、公式ホームページを参照ください。

また今年4月よりラジオ日経「株チャン」で毎週月曜日、午前10時35分ころから5分程度日経平均株価と一目均衡表について話しております。インターネットでも聞けますので、こちらも利用してみて下さい。

ローソク足と先行スパン、遅行スパンの関係で相場の今後を占う

今 年10月の動向が今後の大きな流れを明確にする

前回は日経平均株価月足の変遷について触れ、方向性は明確でないものの変化月として6月、8月、10月が重要と述べました。6月高値は転換線を僅かに上抜いたものの、結局は上値を圧迫される形で戻り高値となりました。その後は下げに転じ7月16日安値1万2671円は先行スパン下限を脅かすものとなっています。

この原稿執筆は8月10日で、ここまで変動では相場の方向性になお確信の持てない状態です。このため8月変化月がいかなる意味を持つかは明確ではありません。

ただ、6月が高値の変化月として決まってしまったことだけは事実です。そのこと自体下げ三波動構成を示唆するものですから予断を許さない状態と言えます。8月の重要性を考えれば6月同様後半に高値をつけるよりは、8月後半に安値をつけ、かつその安値が先行スパン下限に留まり、上昇に転じる形が理想です。その場合どれだけの上昇力を見せるかで考え方

は変わってきます。が、その場合より重要な今年10月からの動向いかんで相場の方向性を決定的なものにすることでしょう。

今回は日経平均株価月足の変動に触れながら、一目均衡表の活用例を説明したいと思います

図1をご覧ください。

ここでは相場実線(ローソク足)と二本の先行スパン、そして遅行スパンと二本の先行スパンにご注目ください。

今年1月までの下落で、相場実線はいったん先行スパン不限を割り込みましたが、終値で何とかこれを上抜く結果となりました。遅行スパンはローソク足だけでなく先行スパン上限を割り込んでいます。この1月終値(遅行スパン)が05年12月の転換線と同水準の位置にあることをご記憶ください。

3月までの下落でも相場実線は、いったん先行スパン下限を割り込み1月同様終値で戻しています。この時の遅行スパンは転換線、基準線とともに割り込み、遅行スパンを下支えする均衡表は先行スパン

下限のみという状況です。

6月までの上昇では実線は先行スパン下限、転換線まで頭打ちとなりましたが、遅行スパンに目を向ければ先行スパン下限で頭打ちとなっていることが判ります。

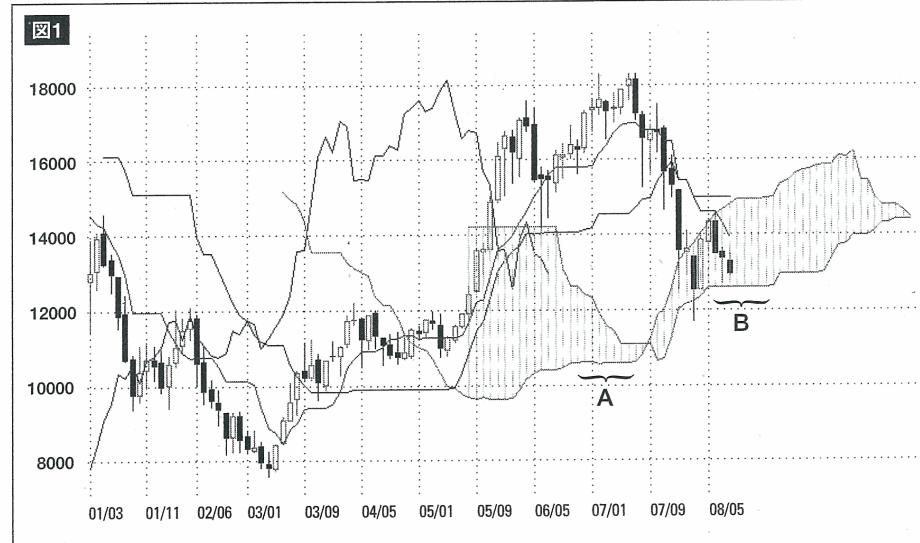
先行スパンの下限1万400円を念頭に置く必要も

原則的に一目均衡表は、相場実線と各線との関わりで押し目の限界、戻りの限界を見極めるのであります。このように遅行スパンと各線の関係も大事なのです。先に述べたように、8月現在の遅行スパンを下支えする可能性は1万400円から1万600円どころを変動する、06年7月以降の先行スパン下限のみであることが判るでしょう(A)。

相場実線を下支える線は8月実線の真下にある先行スパン下限1万2583円のみでこれは来年1月まで変わりません(B)。

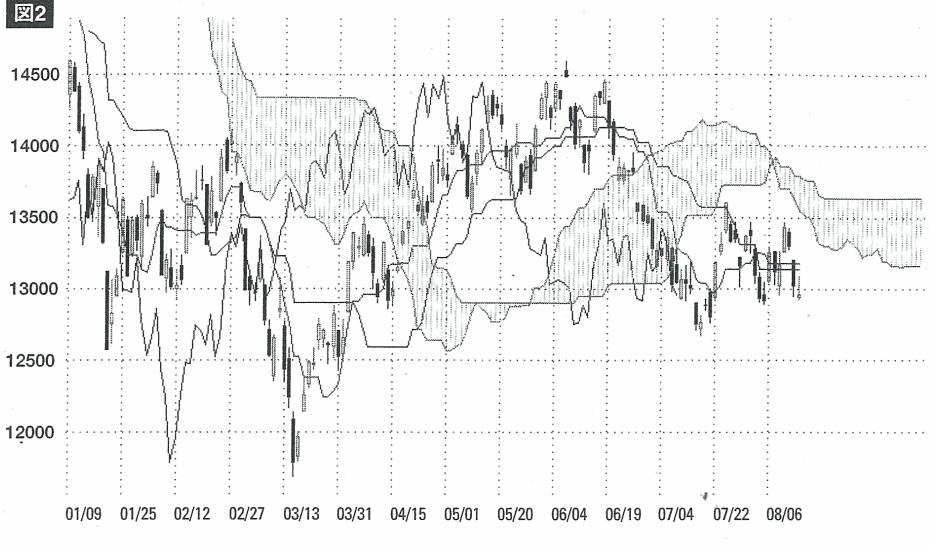
従って1万2583円への達し方、そこからの戻りの弱さによっては直ちに1万400円水準への下落を念頭に置かねばならぬというほどの図表の現れ方です。7月16日に安値1万2671円に達し、その後の戻りがごく僅かであった以上、8月始めに1万2583円を割り込む場合、8月終わりから下げ始めたら、特に相場の悪化を警戒する必要がありました(8月10日現在8月後半の現れ方は明確ではありませんが、恐らく月足先行スパン下限割れはなく戻していくことを期待しています)。

8月変動がどのような形で終わるかは、現時点で明確ではありませんが、仮に8



出所：インフォシーカマネーより

図2



出所：インフォシークマネーより

月以降も方向性が定まらない時には先に述べたように10月にはハッキリとしてくるはずです。

仮に下落なく推移しても遅行スパンは10月には急激に下げている先行スパンに晒されることになります。6月以降下げきっている転換線も9月には1万3423円、10月には1万3146円と改めて相場実践との関係を試すことが予想されます。変化月における各線の交わりは相場の方向を明確にしやすいものでもあります。

以前、昨年10月からの悪化は長期低迷を示唆するとコメントし、長期変遷からは昨年2月高値、あるいは同年6月高値から37カ月の低迷は懸念すべきとしました。この37カ月という数を重要視するならば今年2月、あるいは今年8月からいったんは

上昇力を見せるほうが相場にとって望ましいという事は整理しておいた方が良いでしょう。

一目均衡表の方式では、 $37 = 13 \times 3 - 2 = 19 \times 2 - 1$ となります。昨年2月から13カ月目は今年2月、19カ月目は今年8月となります。これまで説明した相場水準の観点や、三波動構成からも大事であることは既に指摘しましたが、決められた37カ月の変動で下げ相場の時間償却がなされるためには今年8月で一応の底打ちを確認できる方が望ましいのです。

相場の定型的変動を想定することが大切に

このように相場の定型的変動を想定しておくことは特に極めて大事なのです。

想定と異なる変動では失敗すると考える人がいるかも知れませんが、想定と異なるということは一目均衡表においては基本波動を見誤っているということです。そのこと自体、より確かな基本波動を確信できるケースが多いわけで、仮に8月からの反発がなければ、10月までのモミアイか下げ相場は明確であるといえるでしょう。またモミアイといっても相場実線、遅行スパンからその変動は限定的であることが想定されます。もし判断出来ないケースだったとしても、そのつどの対処は楽でしょう。

今年始めに述べました「途轄商い」は要するに想定外を生かす準備が出来ているのみですが、なすべきことであります、確信を持てる時というのはそれほど多いわけではないことも、ご理解いただかねばなりません。

今回は遅行スパンの活用例と併せて月足変遷について述べましたが、これは日足変動においても実例を挙げることができます。

図2は日経平均株価日足の一目均衡表となります。4月23日から5月28日までの変動に注目ください。

4月23日からの上昇で相場実線は先行スパン上限を上抜きましたが、結局は6月6日を高値として下げに転じています。遅行スパンに目を向ければ4月23日に先行スパン下限を上抜いていることが確認でき

るでしょう。以降5月19日高値から5月28日安値まで遅行スパンは下げる先行スパン上限に高値を圧迫される形で推移していることが判ります。

つまり、いったん先行スパンに入り込んだ遅行スパンは、そのままもう一本の先行スパンに達しやすいとも言えます。時間関係とあわせて考えればより明確に相場の方向を明確に出来るケースも多いのです。

4月23日から5月16日までの変動で、遅行スパンは先行スパン下限から上限に達したわけですが、この間、8日の対等数で三波動構成をなし、遅行スパン(終値)ではほぼN計算値で5月16日高値をつけていることが判ります。

5月16日高値は大いに警戒を要した位置であり、6月6日高値までの上昇は相場実線が先行スパンを上抜いた、その余力に過ぎません。

今年4月から6月までの日経平均株価に関するブログ「一目均衡表日記」において毎週月曜日に相場コメントとして載せております。これはラジオNIKKEIの「株チャン」月曜放送の説明原稿ですが、放送、ブログと併せてご研究いただくと理解が深まるものと考えます。

次回は変化日について解説します。極めて大事な概念であります。一回で済むかどうか判りませんが、竹内先生の巻頭文を予め整理していただくと良いかも知れません。